

「固定観念を覆す＝私らしく生きる」

第一線で活躍する朝霞市出身のアーティストであり、「第12回さいたま輝き荻野吟子賞」の受賞者でもある、高橋理子さんにお話を伺いました。

裁縫をする祖母と母を見て育ったことから、「ファッションデザイナーになりたい」という気持ちを小学生の頃から持つようになりました。新座総合技術高等学校で服飾の基礎を身に付け、オリジナルの生地で作りたいと、東京藝術大学で染織について学びました。フランスで活動をしていた頃に日本の文化である着物のすばらしさについて説かれたことが転機となり、それまでの「ただ素敵な服を作りたい」という思いが、「着物の価値や意義について発信したい」という思いに変わりました。

着物の伝統を継承し守る職人は男性社会であり、初めのうちは女性であることや、今までにない斬新なデザインであることから門前払いの日々でした。それからは、相手と対等に渡り合えるように、一心不乱に勉強し続けることで、さまざまな方からご協力いただき荻野吟子賞を頂けるまでになりました。私は良くも悪くも完璧主義で、常に自信がないからこそ、探求するし頑張れる。「私らしい」作品をつくるために、どこまでやっても満足することはないと思います。

振り返ると、「女の子らしくしなさい」「勉強しなさい」と両親から言われたことは一度もありません。女の子だから赤いランドセルを持つことに疑問を持っていたし、自由な家庭環境の中で、いつも自分で考え判断し行動してきました。固定観念を打ち破らなければ、本当のことは見えません。「着物」「円」「直線」という限られた枠の中で追求した作品で、「当たり前」とされることについて人々が深く考えるきっかけを作っていきたいと思っています。

昨年出産を経験し、仕事のパートナーでもある夫とともに協力しながら子育てをしています。仕事と子育ての両立に悩む方は多いですが、誰もが働きたいときに働くことができる世の中になればと思います。

子どもたちには、固定観念に捉われることなく、与えられた環境の中で精一杯頑張ってみることから個々の能力を見出し、夢に向かって歩いてほしい。

最後になりますが、性別ではなく、人として認め合える社会の実現を強く願います。

〈プロフィール〉

たかはしひろこ 1977年生まれ、朝霞市出身。高橋理子株式会社代表。

円と直線のみで構成された図柄により、独自の活動を展開するアーティスト。  
着物を表現媒体とした創作活動のほか、日本各地の工場や職人とのものづくりを  
行い、その作品は海外においても高く評価されている。

(次回は5月号に掲載します。)

